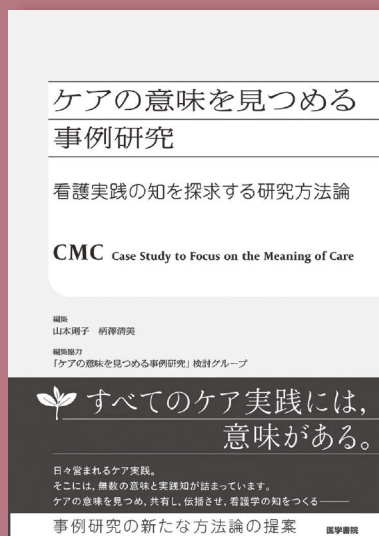


書評

ケアの意味を見つめる 事例研究

看護実践の知を探究する研究方法論



- 編集 山本則子 柄澤清美
- 編集協力 「ケアの意味を見つめる事例研究」検討グループ
- 定価 3300 円 (本体 3000 円 + 税 10%)
- 判型 B5
- 頁数 224
- 発行 医学書院

評者

千葉大学大学院看護学研究院先端実践看護学研究部門
高度実践看護学講座 教授
専門職連携教育研究センター
千葉大学医学部附属病院総合医療教育研修センター

酒井郁子

世界観の変容から世界線の移行へ

山本則子氏は 2000 年代の数年間、千葉大学看護学部の准教授として在籍されていた。同時期に私も准教授として在籍し、学生の授業評価や学術推進の仕組みづくりを共に行った。「田んぼのあぜ道を爆走するボルシェ」という異名は、私が彼女の仕事ぶりを評して付けたものだ。それ以来、折に触れ多くの対話を重ねてきたが、その中で彼女は何度か、「この事例研究の仕事は本来、千葉大が取り組むべきだった」と語っていたことを今も忘れない。

本書『ケアの意味を見つめる事例研究』は、看護の実践知と学術知の架け橋という次のステージを明確に示す 1 冊である。第 1 部、第 2 部では、実践に内在する意味を掘り起こし、事例研究という方法論によって、その意味を可視化・言語化する営みが丹念に展開される。そして本書の価値は、「事例研究の方法」を分かりやすく解説するだけにとどまらない。特に注目すべきは、第 3 部の第 7 章、第 8 章において、事例を学術的に洗練させ、査読に耐えうる論述とし、研究論文として社会に開示するための具体的な方法を提示している点である。

経験の描写にとどまらず、その背後にある意味を問い、他者と共有可能な知へと昇華する。この営みは、実践と研究の境界を越える知的挑戦であり、看護師の語りを学術的・社会的に意義あるものとして位置づけ直すものだ。特に第 7 章では「事例研究の査読はどうあるべきか」について踏み込み、研究者と査読者双方の視点を踏まえながら、触発性・新規性をどう評価するかという問いに誠実に応えている。

そして第 4 部第 9 章では、事例研究を通じて看護観を見だし、語り直し、実践への意味づけがどのように変化するのが、実践者自身の言葉で記されている。読んでいて、看護の実践と学びが生き生きと往還するような手応えを感じた。

本書を通読して、私の中で 2 つの伝えたいことが浮かんだ。

1 つ目は、「良き実践の意味」を問うことの持つ触発性についてである。山本氏は、事例研究の意義を「世界観の更新」として捉えている (121 頁)。ここでいう世界観の更新とは、当たり前だった価値観を揺るがし、こうあるべきと思っていた構造に亀裂が入り、実践や判断の基盤が再構築されるようなことだ。つまり、読者は同じ物理的現実に生きていながら、意味の世界において別の次元に立ち上がる。この動きを、私は「世界線が変わる」と表現したい。実践の語りを読むことで、読者は新しい世界線にジャンプし、異なる意味世界でケアを捉え直すことができる。ケーススタディとは、ただの記録ではなく、読者を別の世界線に誘う力を秘めた装置なのだ。たぶん、読者の数だけ異なる世界線が生まれているはずである。

2 つ目は、こうした「意味を見つめる事例研究」が、過去の実践の語りを起点とする回顧的・解釈的営みと一見みえるが故に、事例研究の読者が触発されなければ、世界線の移行は生じず、次の事例に相対した時に、これまでの世界で行われてきた看護をなぞってしまうことが生じるのではない、という問いである。特に看護計画の「評価」が問われる設計型（前向き）事例研究では、「思ったとおりの効果が得られた。この看護目標は達成された」で終わってしまうリスクがある。

そうならないために、事例研究の触発性を高めるには、「メタファーを生み出す力」が必要となる。この力はたぶん 1 人で伸ばせるものではなく、実践について語り、メタファーを引き出すパートナーが必要だろう。

看護実践について語り合う——当たり前のことだが、当たり前にできているかを自らに問いかけるとともに、メタファーを生み出す力をどう伸ばすかについて論述することは、山本氏の次の仕事であるようにも思った。